

令和6年度全国高等学校総合体育大会 「審判員報告」

C 2

女子審判長 木村幸代

1. 採点上打ち合わせた事項（監督会議での報告事項も含む）

（1）適用規則の確認

採点規則 2022 年版変更規則 I、女子体操競技情報 33 号及び全国高体連制定の高校適用規則を適用する。

（2）採点指針の確認

採点指針に則り、美しい姿勢での演技を採点の最重要項目とすること、技の姿勢欠点はもちろん演技全体を通した身体の姿勢や足先の美しさに欠ける演技は厳密に減点し、美しい姿勢での演技との差を明確化させる。

（3）Dスコアへの問い合わせについて

まずは直接D 1 審判へ口頭で質問をし、意見の相違がある場合は書面を審判長に提出する。問い合わせの時間に関しては、基本的には次の種目に移動するまでの間、最終演技者については、次の種目のウォーミングアップの時間内に対応をすること。検証用のビデオはないため、再検証はできないことの確認。

（4）練習時間について

【予選】 1組最大6名（チーム4名+個人2名）

VT：1人2本

UB：チーム3分20秒、その後個人各50秒

BB：チーム2分、その後個人各30秒

FX：3分

【決勝】 1組最大5名（4名+種目別通過者1名）

VT：1人2本

UB：チーム3分20秒、個人各50秒

BB：チーム2分、個人各30秒

FX：チーム・個人ともに2分30秒

（5）出血の対応について

出血があった場合には、速やかに競技スタッフまたは救護係へ連絡をすること。競技の進行に関わる場合はD 1 審判へ申し出ること。

2. 採点上起こった事項とその処理

（1）チーム選手の誤った演技順での競技

提出されたオーダー用紙と演技順が異なっていたため減点にて対処した。

「当該種目のチーム得点より -1.00」

(2) 演技中のコーチのかけ声（合図）

演技中に選手への指示となるようなかけ声や応援と見られるかけ声、拍手をする監督がいたため口頭注意にて対処した。（複数件）

(3) 競技中の演技台での練習

国内競技会ではマット上が演技台となるため、助走路を含むマット上での練習は演技中、採点中できないことになっているが、練習をしている選手がいたため口頭注意にて対処した。（複数件）

3. その他特記事項・意見・感想等

パリオリンピックと同時期に行われた今大会は、多くの観客、大きな声援の中での熱気溢れる開催となりました。参加選手、監督をはじめ関係者の皆さんのご尽力により、すべての競技を無事終えることができました。採点業務においても、タイトなスケジュールではあったもののスムーズに業務をすることができ、予定されている時程に遅れることなく進めることができました。得点集計システムに不具合は発生せず、担当者の皆さんが演技中に迅速なサポートをしてくださったことがスムーズな業務に繋がったと思います。関係者各位に改めて感謝申し上げます。

「美しい姿勢での演技」これが採点の最重要項目として採点指針に掲げられています。これまでも膝・つま先はもちろんのこと、手先足先まで身体のすべてに意識が行き届いている、そんな演技を目指して欲しいと願い続けてきました。そして今大会、日々意識をして練習を積み重ねてきたであろう演技がとても多く見受けられたように思います。個々の技だけではなく、立っているとき、ポーズをしているとき、歩いているときすべてに求められる「美しい姿勢での演技」を今後も選手自身が大切にして欲しいと切に願います。

「美しい姿勢での演技」や「表情を含め表現力豊かな演技」は、会場にいるすべての人を感動させるものです。技の成功だけではなく、観衆を魅了することができる演技を目指し、高校生たちがさらに活躍してくれることを心より願っています。

跳馬

D1 審判員 白川 千尋

1. 採点上打ち合わせた事項

(1) 採点指針の確認

情報 33 号の採点指針に則り「Dスコアの高い跳躍技」「跳躍全体にスピード感があり、高さや距離を伴うダイナミックな跳躍」「着地の先取りができた高い体勢での安定した着地」の3点を重視し、各審判が各技の理想像を持って採点を行うことを確認。第一空中局面の膝の曲がりや脚の開き、支持局面のひねり不十分、着地の姿勢に特に注視し、各局面において著しい技術不良や、危険を伴うような未完成な跳躍、ダイナミックさに欠ける跳躍に対しては、第8章「一般欠点と減点表」、第10章「種目特有な実施減点」の項目を有効に使用し、厳密に減点することを確認した。

変更規則 I において「グループ1の跳躍技のみ」に適用される種目特有な実施減点、「(追加) 支持局面・支持が長い 0.10/0.30/0.50」「(変更) 第2空中局面・ダイナミックさに欠ける 0.10/0.30/0.50」についても確認した。

(2) 線審の任務確認

練習回数のカウント、ラインの踏み越しの判定の確認。

コーチからライン減点の再確認の要求があった際に備え過失の状況を記録することを確認。

2. 採点上起こった事項とその処理

決勝にて、伸身ツカハラとび1回ひねりを試みたが足から先に着地できなかった実施に対し、審判長に確認の上、無効 0.00 と判断した。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会ではどの選手からも情報 33 号採点指針に掲げられている「高いDスコア」を目指して練習に取り組んできた姿勢が見受けられ、その中でも、ダイナミックかつ高い体勢での安定した着地まで完成度を高めている選手は、高いEスコアを獲得することができていました。

その一方でDスコアの高い跳躍技を実施しても、第一空中局面での膝の曲がりや脚の開き、支持局面でのひねり不十分など各項目 0.30 以上の減点が伴うような跳躍、もしくは着地の先取りができず低い体勢での着地になってしまう跳躍については、高いEスコアを獲得することはできませんでした。また、怪我をしてしまうのではないかと心配されるような跳躍も見受けられました。

2024 年採点指針では「Dスコアの高い跳躍技」を推奨はしていますが、姿勢欠点が多く、高さスピードのない実施については厳密に採点することとしています。難しい跳躍技に挑戦する前段階において、着地の先取りができるような雄大な跳躍が習得できているかを見直し、跳馬の醍醐味であるダイナミックさを表現できるように練習に励んでいただきたいと思います。

段違い平行棒

D 1 審判員 阿部 恵子

1. 採点上打ち合わせた事項

(1) 採点指針の確認 (情報 33 号)

<採点上の最重要項目>

- ① 身体の細部までコントロールされた常に美しい姿勢での演技
- ② 欠点のない正確な技の実施
- ③ 着地の先取りができた高い体勢での着地

<段違い平行棒>

- ① 腕の曲がり、膝・つま先の緩みがない美しく伸びた体線での正確な技の実施
- ② 車輪系の技や支持回転系の技、空中局面を伴う技の振幅が大きいダイナミックな実施
- ① ②を満たせとうえで
- ③ 多様な技を取り入れ、組み合わせ点を獲得できる演技構成

以上を最重要視したうえで、基本技の姿勢や各技の振幅の大きさにおいては特に注視し、指針を満たせた演技を評価することと、指針に沿わない演技は減点項目のいずれかから減点することを確認した。

(2) 短い演技の確認

「短い演技」とD審判が判断した場合は、技の実施数によりEスコアの最高点が異なるため、その都度承認した技数をE審判団へ口頭にて伝えることを確認した。

(3) アシスタント任務の確認

計時の任務内容（練習時間の管理・落下中断時間の計り方）の確認をした。また過失はすべて記録しておくことをお願いした。

2. 採点上起こった事項とその処理

(1) 落下後、中断時間の超過（1名）があったため、採点規則に則り最終スコアから0.30の減点を行った。

(2) 空中局面を伴う技を実施し、高棒に腕と額を打ち落下した選手が直ちに立ち上がることができなかった。頭部（額）を打っていることもありその場で医師の診断を受け演技再開が可能であるか、選手の安全を確認した後、本人（選手）とコーチも演技再開を希望したため、採点規則に則り立ち上がったところから落下による中断時間を計測し演技を再開した。

3. その他特記事項・意見・感想

今大会、予選では259演技が実施された。Dスコアの最高点は6.1、Eスコアの最高点は8.366であった。予選でのDスコア・Eスコアの内訳は、表-1の通り。

表-1 予選 Dスコア・Eスコアの内訳

Dスコア		Eスコア	
5.5以上	16演技	8.00以上	12演技
5.0～5.4	27演技	7.50～8.00未満	28演技
4.5～4.9	42演技	7.00～7.50未満	16演技
4.0～4.4	25演技	6.50～7.00未満	40演技
3.5～3.9	24演技	6.00～6.5未満	52演技
3.5未満	125演技（0点4演技含む）	6.00未満	111演技（0点4演技含む）

決勝では80演技が実施された。Dスコアの最高点は6.1、Eスコアの最高点は8.50であった。決勝でのDスコア・Eスコアの内訳は、表-2の通り。

表-2 決勝 Dスコア・Eスコアの内訳

Dスコア		Eスコア	
5.5以上	14演技	8.00以上	8演技
5.0～5.4	26演技	7.50～8.00未満	31演技
4.5～4.9	27演技	7.00～7.50未満	15演技
4.5未満	13演技	7.00未満	26演技

今大会、段違い平行棒の種目別上位入賞者だけではなく、Dスコアが 3.5 未満の選手の中にもけ上がり、前方支持回転、後方浮支持回転、車輪などの技を美しい膝・つま先で実施している選手が数名いたことは良い傾向であると感じた。難しい技や難度の高い技に挑戦することは体操競技の醍醐味だが、できる技を美しく実施し、姿勢欠点のない完成度の高い技を大会で演技（実施）することは全ての体操選手にとってとても大切なことである。今後も日々の練習を積み、「美しい姿勢での演技」「正確な技の実施」を日本全国の高校生が目標として欲しいと強く願う。

そして、上位入賞を目指している選手は、高いDスコアを獲得するために、高い難度の技や組み合わせに挑戦していた。また、その選手の多くは終末技においても終末技ボーナスを獲得するためにC難度・D難度の技を実施していた。インターハイで適用している『変更規則 I』では、終末技で大過失があっても終末技ボーナスを獲得することが可能であるが、行われた終末技の実施によっては「高さの欠点」「姿勢の欠点」「正確さ」「着地での欠点」などが積み重なり、ボーナス以上の実施減点が発生してしまう。現在の規則では、Dスコアの向上だけを目指し難しい技に挑戦しても減点が伴えばトータルのスコアは上がらない。段違い平行棒の基本技であるけ上がり、振り上げ倒立、車輪の姿勢欠点をなくすことはもちろんだが、終末技においても「美しい姿勢」「正確な技の実施」「高い体勢での着地」を目指し減点の少ない実施を目指していただきたい。

平均台

D 1 審判員 香月あゆみ

1. 採点上打ち合わせた事項

(1) 採点指針の確認 (情報 33 号)

平均台の採点指針 4 項目を確認。アクロバット系の技でもダンス系の技でも、常に手先足先までコントロールされた美しい姿勢での実施、正確で安定した技の実施、加えて身体を最大限に使った動きによる芸術性豊かな演技を評価することを共有。一つひとつの技はもちろんのこと、演技全体の理想像を持ち、指針に沿った演技とそうではない演技との差をEスコアにて明確に表すことを確認した。

ダンス系の技の不正確な実施に対しては、「身体の姿勢」「正確さ」の項目にて厳密に減点すること、特に「身体の姿勢」については、減点が不要な実施なのか、減点が 0.10 なのか 0.30 なのか、もしくは 0.50 なのか、その質の差をしっかりと見極めることを共有した。あわせて芸術性と構成の減点項目についても項目ごとに確認し、各項目がどのような実施に対して減点されるのか確認した。

(2) 短い演技についての確認

「短い演技」とD審判団が判断をした場合は、技の実施数によりEスコアの最高点が変わるため、その都度承認した技数をE審判団へ口頭にて伝えることを確認した。

(3) アシスタント任務の確認

計時の任務内容 (予選・決勝の練習時間の計り方、演技時間・落下中断時間の計り方)を確認した。また、コーチからの質問があった際に対応できるよう、記録をしておくことを確認した。

2. 採点上起こった事項とその処理

特記事項なし

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会の予選 255 演技において、Dスコアの分布は以下のとおりです。

5.5 以上 29 名（最高Dスコア 6.2）、5.0 以上 5.5 未満 64 名、4.5 以上 5.0 未満 63 名、4.0 以上 4.5 未満 35 名、3.5 以上 4.0 未満 17 名、3.0 以上 3.5 未満 20 名、3.0 未満 27 名でした。また、Eスコアにおいては、8.00 以上 15 名、7.50 以上 8.00 未満 17 名、7.00 以上 7.50 未満 36 名、6.50 以上 7.00 未満 40 名、6.00 以上 6.50 未満 39 名、6.00 未満 108 名と、過半数が 7.00 未満となり、スコアが伸び悩んだ印象を受けます。

多くの選手が高いDスコアの獲得を目指した演技構成に取り組んでいるように感じました。組み合わせ点を得るために様々な技の組み合わせに挑戦する選手、終末技ボーナスを得るためにD難度以上の技に挑戦している選手も見受けられました。また一方で、未完成な技の実施のため、落下などの大過失はもとより、平均を保つための余分な動き 0.30 や 0.50 の減点も多く見受けられました。終末技においては高難度の技に挑戦しても、着地での姿勢の欠点や非常に大きなステップ等が見受けられ減点対象となることもありました。ダンス系の技においては、膝やつま先の緩み、開脚度、規定されたひねりの不足、上半身の姿勢等不正確な実施が多く見受けられました。また、芸術性の観点からは多様な振り付けを行っているように見えて、身体の姿勢に欠点があったり膝やつま先の緩み、不十分なつま先立ちの動きであったりと、まだまだ減点が見受けられ、Eスコアが伸び悩む原因であると感じられました。技の承認においては、しゃがみ立ちターンや横向きの 1/2 ひねりを伴うジャンプにおいて承認できず、異なる技として承認したものが多くありました。基本の立ち姿勢はもちろんのこと、技一つひとつの正確で安定した実施が重要であると感じました。上位の選手は立ち姿勢や表情、指先つま先までコントロールされた美しい表現、演技全体を通しての身体のハリや、流れのある芸術的な実施でした。今後も選手の皆さんが、常に美しい姿勢を意識して欠点のない正確な技の実施を目指すとともに、演技全体に流れのある芸術的な「ひとつの作品」となるよう練習を積んでほしいと思います。

ゆか

D 1 審判員 高橋 洋子

1. 採点上打ち合わせた事項

(1) 採点指針の確認

体操競技情報 33 号に記載されている採点指針を確認。特に「美しい姿勢」、「正確な技の実施」、「芸術性」を重視し、指針に沿った演技とそうでない演技との差をEスコアにて明確に表すことを確認した。また、技以外の部分にも注視し、種目特有な実施減点に該当する演技については減点項目に則り減点をすることを確認した。

(2) アシスタントの任務の確認

計時・線審の任務内容を確認し、コーチから減点の再確認の要求があった際に速やかに対応できるよう、過失はすべて記録しておくことを確認した。

2. 採点上起こった事項とその処理

チームのオーダーミス1件（予選）。当該種目のチーム得点から-1.00の減点。

3. その他特記事項・意見・感想等

予選で実施された254演技のうち、Eスコア8.00以上は16名（6.3%）、7.50以上8.00未満が36名（14.1%）、7.00以上7.50未満が52名（20.5%）、7.00未満が150名（59.1%）で、Eスコアの最高点は8.50でした。全体的に「美しい姿勢」、「欠点のない正確な技の実施」、「芸術性」を意識して取り組んでいる選手、チームが増えてきている印象を受けました。特にダンス系の跳躍技において高さや身体へのハリがある正確な実施、芸術性において身体を最大限に使った動きや表現力豊かな演技が多く見られました。引き続き高いEスコアの獲得を目指し、演技に入っている1つ1つの技を正確に実施すること、そして芸術性にも重点を置いて完成度の高い演技を目指していただきたいと思います。一方でアクロバット系の技で高い難度の技や組み合わせ点を獲得できる組み合わせを実施しているものの、ダンス系の技の実施減点や芸術性の減点が多く、Eスコアが伸びなかった選手も見受けられました。また、種目特有な実施減点の「調整（振り付けのない踏み出し）」、「演技の開始ただちにアクロラインを始める」、「アクロラインの後、間に振り付けがなく同じ対角線上で続けてアクロラインを実施する」、「アクロラインの後に1回より多く立て続けにアクロラインを実施する」、「アクロバット系の技で演技を終了させる」の項目に該当する演技も非常に多く見受けられました。これらはルールを理解し、振り付け等を工夫することで避けられる減点です。Eスコアを上げていくために改めてルールや演技構成を確認していただき、今後の大会に向けてぜひ修正をしていただきたいと思います。

以上